

使われてきたさまざまな民具... 幕別町蝦夷文化考古館

幕別町蝦夷文化考古館は、吉田菊太郎（アイヌ名アリトムテ：1896～1965）さんが、晩年、アイヌ民族の伝統的な道具や着物が身近なところから消えていくのを悲しみ、先祖が残した民具や宝物を保存しようと、つくった資料館です。昭和34年（1959）のことでした。

菊太郎さんは、チロツトコタン（幕別町）のリーダーであり、十勝の、そして北海道のアイヌ民族の指導者でもありました。蝦夷文化考古館では、アイヌの人たちが実際に使っていた、うるしぬりのシントコやイタンキなどの器、チタルペ（ゴザ）、刀、弓矢、マレク、チブ（丸木舟）、衣服... といったさまざまな生活用品や宝物、それに写真などを見ることができます。

昭和40年（1965）に菊太郎さんが亡くなると、遺族の方が建物と収藏品すべてを幕別町に寄付しました。

そのほか、各市町村の博物館などでも、アイヌ文化に関する展示を見ることができます。

帯広百年記念館には、アイヌ民族文化情報センター「リウカ」があり、本やビデオなどに記録された映像、音、あるいは遊びなどを通して、アイヌ文化にふれることができます。



アイヌ民族文化情報センター「リウカ」（帯広百年記念館）。リウカとは「橋」の意味。



幕別町蝦夷文化考古館の展示。



幕別町蝦夷文化考古館の展示。



幕別町蝦夷文化考古館の位置。幕別町字千住

十勝のアイヌ民族に関する口承と記録... 語り伝えと文字

かつての伝統的なアイヌ社会では、語り（口承）によって歴史が伝えられ、文字による記録は残されていません。伝わるうちに、少しずつ変わることもあるでしょう。

一方、当時のできごとについて文字で記録されたものは、和人が外国人のものになります。どんな観察者でも、自分の社会の見方にしばられ、また、自分（たち）に都合よく記録することがあるので、記録を見る時には注意が必要です（現代の本、教科書やこの本でもそうです）。

ソバウスとその子中村要吉（イベツカレ）など、アイヌの人の語り伝えによると、およそ400年くらい前、十勝内陸部には、古くからの一族（村長：チパイコロ）が帯広に、北見系の一族（村長：シャガニ）が音更に、そして石狩系の一族（村長：モザルク）が札内にいたとい

ます。（『帯広市史 平成15年編』より）

文字による、十勝のアイヌ民族についての最も古い記録は、オランダの探検家フリースの『日本北東航海旅行記』にあります。

1643年、オランダ東インド会社のフリースが指揮する船カストリウム号は、日本周辺の金・銀を調査中でした。

フリースたちは十勝沖で停泊中、少年1人をつれたアイヌの男性2人の舟に出会いました。

記録によると、「彼らは北西を指し、自分たちはそこに住み、そしてそこはタカブチと」と教えてくれます。また、「彼らはあらい麻布を着、その上の衣服は毛皮製であった」と記されています。（『1643年 アイヌ社会探訪記（北構保男）』より）

2 帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館
3 リウカ：アイヌ語で「橋」の意味。

4 文字（もじ）：文字は、支配者が生まれることによって必要とされるといわれている。現在、日本には文字によるさまざまな文化が生まれているが、もともと日本には独自の文字はなく、基本的に中国の漢字を輸入して利用した。かなも、もとは漢字である。